

『学図』一九五三年六月（学校図書）

社会現実の学習

— 地・歴・修身論の位置づけ —

国立教育研究所 矢口 新



現在、社会科が様々な観点から批判検討の座に上っている。いわゆる地理教育、歴史教育、道德教育の見地から多くの不満が述べられているようである。それらが必ずしもすべて正しいというのではないけれども、最も根本的な点で社会科が大いに耳をかさねばならぬものがあるように思われる。それは社会科の現実性ということである。

○ 社会科の現実性

よく言われることに社会科をやっているとは大阪も分らない子供が出来てしまうとか、日本の国の成り立ちが分らなくなるなどということがある。これは極めて素朴ではあるが、ある意味で現在の社会科を痛烈に批判しているといえる。例を教科書にとってみると、一体大阪という都市を社会科教科書はどれ位

問題にしているであろうか。昔の地理教科書のように大阪について地誌の如きものがないのはならぬというのではない。併し社会科というものが、現実の日本の社会についての学習をするものであるならば、我が国の代表的な都市の現実は何所かで問題にされなくてはならぬ筈であろう。我が国の生産の現実を取扱っても、消費生活の現実を取扱っても、交通の現実を問題にしても、保健衛生の問題を取扱うにしても、それが現実の社会の姿を解明し、その問題を分析し、その構造を明らかにするものであるなら、恐らく大阪などというものはどうしても取扱われる筈であろう。

○ 教科書には具体的な教材を入れよ

所が教科書をみると、決してそうはなつて

いないのである。何所の国の何所の土地だけ分らないような極めてあいまいな漠とした生活が取扱われているのである。教科書にあることは極めて一般的な概念にすぎない。これはもちろん教科書のことであつて、現実の社会学習は教師の指導によつて行われるのであるから多分現実的に行われているのである。それなら一体教科書はどういう役割を果しているのだろうか、教科書にあるのは架空の土地の架空の社会に於ける架空の出来事が多いのだが、それは考え方を養うという点では役に立つものである。併しそういう一般的な考え方で止る限り、極めて抽象的な概念であるにすぎない。考え方が現実の事実の中で使用されない限りはやはり単なる観念的知識にすぎない。だから教師が指導して現実の社会に材料をとつて確かめさせない限り、生きて働くものとはならないのである。そういう現実の社会の実態を把握する学習には、それだけ現実的な教材が必要であるが、それをすべて教師にまかせてしまうことは徒らに教師の負担を過重にするだけであろう。そういう教材が今のところ教科書には望めないとする、様々な市販の参考書類その他の視聴覚教材などに頼らなくてはならないことになるが、その辺に何か大きな穴が

あるような気がする。

○ 空虚な観念的知識を排せ

教師は誰も熱心に社会科の指導をしているが、それには社会的現実の取扱い方に不馴れな点もあり、従って十分な教材を用意するだけの余裕もないし、更にいけないことは教材を教師が選択することが出来る程、社会的条件が整っていない。つまり社会がそういう教材を準備していないのである。そこで結局は教科書にたよった教育になる。そして教科書だけでは、結局観念的知識である。例えば交通が発達すれば生産や消費生活の発達する条件が整ったことになるといったような一種の社会的知識である。これでは如何にも空虚だという感を与えることになる。或る意味では昔の地理、歴史、修身の方がより現実的であったといえるのである。その方が日本の社会の現実をとり扱っていたからである。だがそれがすぐ社会科の廃止、解体論となり、地理、歴史、修身の復活論となるのはいささか困る。そういうことを唱える人のノスタルジアはわかるけれども、その結論はいただきかねる。

○ 自主的にものを考える習慣をつけよ

昔の地理や歴史、修身で困るのは、もうこれまで何度とも言われたようにものを考えることをしないということである。社会の現実を自分の眼で見、自分の頭で整理することをしないで、他人によって整理されたものをただ受けとるだけである。それは、社会の一人一人が自分の判断をもつということとは反対である。所が民主的な社会は一人一人の判断とその協力とによって成立つというたてまえである。それが真の自由というものである。自由な判断を平等に価値あるものと認め、その間の論議によってよりすぐれたものを生み出そうとするのである。場合によっては愚劣な判断が勝を占めるかも知れないが、それは神のみが知る。愚劣な判断が勝を占めたと思う人はそれを克服するだけのすぐれたものを生み出す努力をすべきである。こういうたてまえが成立つにはどうしても一人一人がものを考えることが前提であろう。それには現実を自ら整理し判断させる訓練が必要である。そういう判断の結果としての現実社会に対する知識をもつてもらいたいのである。社会科はその要請にもとづいて生れたものである。

だから社会科に於ては、子供は子供なりの立場でよいから、この社会の現実を整理し、

分析して、自己の判断をもってもらうような学習をさせなければならぬ。もちろんそれは結果としては現代の科学がもっている結論の方に近づいて来るのは当然であろう。けれどもそれをただ受けとるのではなく、自分で障碍を突破して一々根拠ある結論として確認させる必要がある。そういうことをやらせることによって、現実分析の方法と、態度を身につけるのである。それは同じ結論でも力がちがうであろう。こういう学習には要するに子供に必要な現実分析の材料を豊富に与えるということであろう。

○ 子供に問題を自覚させること

社会現実の学習には何よりもまず社会のもっている問題がはっきり自覚されている必要がある。それは問題が解明されているということではない。漠然たる予想でよい。その程度はもちろん人によって異なるであろう。概していえば教師の方が生徒よりはっきり問題を自覚している場合が多いであろう。がともかく、自己の分っている所から出発して問題を究明するのである。その場合には、現実の姿を整理して行くために、自分の自覚した問題を視点として材料をあつめて行くのである。その時には当然現実の学習であるか

ら、その現実の由来を考えて判断し、地理を按じて判断するのである。また問題进行处理するために人間の行動の仕方を分析し、あるべき人間の態度を明らかにするのである。

○ 知識にある程度の体系をもたせよ

社会現実を分析、整理して問題を解明して行くには、その現実が如何なる土地の出来事であるか、それは他の土地との如何なる関連をもっているのか、或はそれと比較してどうなのかなどということを明らかにして行かなくてはならない。そればかりでなく、その事象が如何なる歴史的背景、乃至由来をもつかを明らかにしなくてはならない。そうしてそこに如何なる問題が所在するかが、あらわれるであろう。

地理的知識とか歴史的知識とかも、われわれの社会生活の問題を判断する所に必要なものである。否、判断する過程に於てそういう知識が成立して来るのである。道徳的理解といえどもその体系的知識を知識としてもつこととなく、具体の問題に於て判断が出来るということであろう。それらの知識体系が押えられていることは極めて重要なことであり、それをどういう社会現実の問題に於て判断を通じて自覚されて行くかというこ

とが検討されねばならぬ。その点の検討には現在殆んど努力が払われていないのではないだろうか。

社会現実の学習は、如何なる問題について、如何なる研究方法で、如何なる材料を使つてなされるべきかということの中に於て、地理、歴史、修身を位置づけて行くべきであろう。